ベルリン・シンポジウム

「アンネマリー・フォン・ガバインとトルファン研究」

1994 年 12 月 9 日 - 12 日

昨年末，ベルリン・ブランデンブルグ科学アカデミー（BBAW*）において学術企画「トルファン研究」（いわゆるトルファン研究所）の主催する集会があった．これは，一昨年はじめに逝去されたガバイン女史（Annemarie von Gabain: 1901. 7. 4 - 1993. 1. 15）を追悼し，その古文書研究の業績を顕彰して開かれた学会である．今世紀初頭にドイツ・トルファン探検隊が収集した古文書類の研究は，探検隊長をつとめたルコック（A. v. Le Coq: 1860-1930），イラン学のミュラー（F. W. K. Müller: 1863-1930），トルコ学のバング（W. Bang: d. 1934）らによって開始された．およそ 90 年の歴史をもつ．ガバイン女史は収集品のうち質量とも，もっとも豊富な古トルコ語文献の解明に生涯を捧げられた．著書『古トルコ語文法』（Alttürkische Grammatik）は我々の入門書として唯一の道しるべとなった．第二次大戦後，ハンブルグ大学で教鞭をとり，諸外国の後進の指導にも時を惜しまなかった．

ガバイン女史は，1962 年と 1975 年に来日された．前者では，京都大学において３ヵ月にわたって講義した．ちょうど，龍谷大学所蔵の大谷探検隊資料に関する戦後の刊行物，『西域文化研究』４（京都　法蔵館　1961）の発刊後であった．トルコ語・イラン語関係の，いわゆる胡語資料（羽田明・山田信夫編，大谷探検隊将来ウイグル字資料目録）を点検された．後年，私の最初の写本研究となった「ウイグル文 文殊師利成就法の断片一葉」（『東洋史研究』33-1, 1974）は，このとき親しく読んでいただいた．急いで英文とした私の草稿をみながら，一つひとつウイグル文字を確認した．あまりにひどい英語だったのでこのまま発表するのかと問われて赤面したが，同席の恩師，羽田明先生がそうではなかろうととり繕ってくれたのを思い起こす．写本断片の原典チベット文を発見したのは，おそらくその後である．すりへって不鮮明な写本とその写真を並べて，しばしば写真の方が読みやすいこともあるといわれたのが印象に残る．じつは今回，ベルリンのトルファン研究所で，主催者の P. ツィーメが遺品のなかからみつけたといって，上記英文草稿をとりだした．当日幸いにもガラス・ケースのなかに展示された．それには女史自身の付箋と書き込みがあった．なお 1975 年にも文学部西南アジア史研究室で講義された．10 人以上の学生で座席がいっぱいになった．これほど多数の学生を一度に教えたことがないといって驚かれた．女史は羽田先生のもとで基礎づけられた京都トルコ学のルネッサンス期に大きなインパクトを与えたと思う．

1981 年にハンブルグ大学のウラロ・アルタイカ協会主催で 80 歳誕生記念シンポジウム（７月２日-５日）が行なわれた．最前列にスウェーデンのもと国連大使グナー・ヤリング（中央アジア・トルコ文学）と並んで坐り，発表者ごとに

* Berlin Brandenburgische Akademie der Wissenschaften

短いコメントをされた．７月４日の誕生パーティでは，東ベルリンから P. ツィーメのお祝いのメッセージが仏教版本の折本様式で届いた．若い研究生の J. P. ラウトが朗読した．東西は一つの信念を貫いたガバイン女史は，おたがいなかよくせねばならぬ旨を述べられた．

晩年アンガーの田舎にこもられたが，執筆活動は旺盛に続け，最後には再びベルリンに移り療養された．P. ツィーメの話では，BBAW にちかい聖ヘトヴィッヒ・カテドラルで――女史は敬虔なカトリック――はじめてお会いして研究所へ案内したという．その研究所とは，大戦前彼女の研究の本拠地であったベルリン・ドイツ（プロイセン）科学アカデミーである．いうまでもなく旧東ドイツ科学アカデミーの東洋学研究所となり，いま BBAW のトルファン研究所である．今度のシンポジウムは，ツィーメ博士（トルコ学），その先輩格のズンダーマン教授（イラン学）をはじめとするこの研究所スタッフによって運営された．

その研究所が付属する国立（旧プロイセン）図書館の隣は，フンボルト大学である．そしてシュプレー川の手前に歴史博物館があり，左側の川の，中洲にペルガモン博物館が見え隠れする．橋をわたり，クリスマスをひかえてにぎわう遊園地は，かつての外務省前のマルクス・エンゲルス広場であった．まさに旧東側の中枢部にあたり，巨大建造物が立ち並ぶ．また同時にいま，工事現場に事務所ユニットとクレーンのアームが林立する．戦後第２復興期とでもいえるのであろうか．このまっすぐのびるウンターデンリンデン大通りを逆方向に行くと，東西統一のシンボル，ブランデンブルグ門にいたる．1967 年にはじめて研究所を訪れたとき，西側からこの門を壁越しにのぞくと，「注意せよ！うたれるぞ」という立看板がみえた．今回門の東側で乗ったウンターデンリンデン Sバーン駅は最近 30 年ぶりに再開されたのである．これらの界隈は，宿舎ホテル・シャルロッテンホーフから 2, 30 分のところであり，かつて西側から東側に通ずる検問所のフリードリッヒ・シュトラーセ駅も遠くない．

さて BBAW の会議場はホテルから歩いて数分にあり，国外参加者の多くはそこに宿泊した．ドイツ国内を含めて総員 70 名ちかく，講演者 34 名，総体として出土古文書，碑文および美術にかかわる発表で，古ウイグル=トルコ語関係が多かったが，ソグド，コータン，トカラ，シリア，インドおよび中国の諸言語のテキスト，宗教（仏教・マニ教）・文化など多彩であった．十ヵ国くらいの国外参加者のうち，日本から庄垣内（神戸市外大），梅村（中央大）のほか，資料調査で居合わせた西脇（京大）とトカラ語を研究しているという T. Tamai の両氏がオブザーバー参加した．特筆すべきは，おそらくこのように旧東西ドイツの研究者が一堂に会したことははじめてではなかろうか．ロシアのペテルブルグからも主要なメンバーがそろい盛会であった．到着の早いメンバーによってベルリン自由大学のトルコ学研究所（Prof. Dr. B. Kellner）とイラン学の機関において特別講演シリーズが用意され，私も講演の一端を担うとともに，ウズベキスタンやタタリスタンの研究者とも交流する機会をえたことの僥倖に感謝しなければならない．シンポジウムの報告書は，おそらく，BBAW 最初の学術刊行物となるはずである．（1995. 2. 10: 小田）